

中村武羅夫

小栗風葉氏



小栗風葉氏



自分が風葉氏に初めて会ったのは、去年の初夏のことである。四畳半の書齋で、北向きの磨硝子から軟らかな光線が入って、其窓の下に机が据えてあつた。風葉氏は何かこつこつと筆を執って居られた。がらは大きい方ではない。風采も極く質素で、木綿緹の袷に羽織なしで、黒メリンス帯を締められた。火鉢を中に相對して坐つた。顔の色澤も好く、眼の光りも鋭い。そして身体の隅から隅まで、心地好い程、生々とした才気が溢れて居る。唇

の色が目立って紅かった。その声は活気が籠って明晰だ。アクセントが強い。人物に人を圧する力と云うものは少ないが、その身内に溢れ漲った才気で以て、何物が迫つて来ても弾き返そうとする強い弾力がある。自分は風葉氏の其弾力の為めに、寄って行っても胸と胸と相触れ、相抱擁されることは出来ないと思った。胸の中に熱い血汐が火とも燃えて居よう、事実燃えて居るらしく見えた。見えながらも尚お其弾力の為めに、寄らば弾ね返されそうなる不安があるので寄り得られない。然し、此方に若し其弾力にはね返されない程の重味と力があつたなら、そ

の熱い胸に相触れて、その懐に抱擁されることも出来よう。自分は初めから其胸の血汐の熱いことが目に見えて居た。そして相触れたいと吾が心では切実に願ったが、何か言い難い不安と恐れがあつて、初めより其胸に抱かれることは出来なかつた。此方から胸を開いて行つたなら、相触れることも出来たであろう。然し、何がなし只其溢れるような活気に恐れて、最初から吾が胸を開くに自分は余り憶病であつた。

何か此方で問題を出すと、例の活気の満ちた、アクセスの強い調子で、公表したら随分さしさわりのあるよ

うなことでも、忌憚なく話される。話に力があつて聞いて居ても気待ちが好い。調子が強い。生ぬるいよ、なところがない。黙する時は黙し、口を開く時は熱心に話される。懈るような声で厭々ながらと云う調子はない。

それから、風葉氏の性質は極端にはしる。血も心も熱い、情が緊張して居る。罵る時は飽くまで罵り、痛罵を極めねば承知出来ない。然しそれもパツと燃え上る一時の火花、気が済めば、けろりと忘れて了う。そこに風葉氏の渾然としたふくらみのある人格を見られる。風葉氏の人格には軟らかい大きなところがある。渾然として何



物をも抱擁すると云ったような、ひろい所がある。胸の底には赤熱まぶしい真昼の夏のそれのように、絶えず燃えて居る熱い血汐がある。その血汐をたとえば、長閑な春の日影のうらうらと暖かい人を眠らすような、軟らかな肉でふっくらと包んだ。さて、その肉を覆う皮が、風葉氏の生々とした活気である。強い弾力を持った才気である。その皮に接した人は未だ真の風葉氏を解する人ではない。風葉氏の皮のみを知る人は、風葉氏をなつき、難い人とも云うであろう。然し、その皮を破って肉に接し得た人は、風葉氏を何かなし温かい人のように思う。

その春の日のように和らかな所に包まれて、渾然として酔わされて了うが、それでも真の風葉氏を解したとは言えまい。真の風葉氏を解するには、今一重めくつた胸の底の熱い血に触れて見ねばならぬ。その熱い血をたぎらして居る胸の底に触れなければ、真の風葉氏を解することは出来ない。

で、風葉氏の人格は、然うした三重の要素を以て、出来て居る。熱い血を覆うのはゆるやかに温かい肉である。その肉を包むのは弾力性に富んだ皮である。風葉氏は心の熱烈な人である。時に吾れと吾が胸に燃えたる熱血を

制するに由なくて、その肉を貫き皮を破って火花となつて外部に発する。その時、風葉氏の偽らざる天真、囚われざる吾れは遺憾なく發揮される。そこに風葉氏の眞価値を見出すことが出来る。心の熱が火花となつて散るその時には、風葉氏は何物をも忘れることが出来る。つくられた吾れを没して眞の吾れを發揮することが出来る。それが風葉氏の偉いところだ。そこが風葉氏の生命である。此の心の熱を火花として発する尊いところを風葉氏から奪つたなら、残る所の風葉氏に何があるだろう。

ああした渾然とした大きい所、温い所、軟らかい所は

失せて了って、利害の打算の極めて明らかな、唯一小才気ある人となつて了うであろう。胸の底に漲ぎる熱がある。その熱を卒直に現わされるその事が、旋て風葉氏の芸術ある所以であろう。

自分は始めて会つた時に、人格に血と肉と皮の三重がある人と思ひながら、単にその皮に触つたのみで、肉にすら触れることが出来なかつた。皮を破つて肉まで入ろうとした。然し、最初に於て破るには、肉を覆うた皮が余りに強かつた。自分の力では破ることが出来なかつた。見え透いた胸底の血汐に触れようと、徒らにいらいと

するのみで、未だその皮の外にうろ、うろして居るに過ぎなかつた。人格が単に一重の人は初めて会って、意気相投すればそれで好し、若し然らずば直ぐ離れて了うまでだ。然し、風葉氏に接すると然うした三重の要素に依つて作られた人格が明らかに見られる。そこで、その底の底にある熱いところまで触れて見たいと云う切実な願が起る。触れることを願いながら、その外部の皮の為に空しく触れ得られない時には、まだるくもある、忌々しくもある。

自分は度々会って、滅茶苦茶に此の皮を破らねばなら

ぬと思った。破った。そして胸の底まで触れねばならぬ  
と思った。







日本文学電子図書館

---

現代文士廿八人

著 者：中村武羅夫

制作者：宮澤一郎

出版社：日高有倫堂

明治42年7月10日 印刷

明治42年7月16日 発行

---

日本文学電子図書館